

【寄稿】奥田八二と「Museum Kyushu」誌：社会思想史の専門家がのめり込んだ九州国立博物館誘致活動

大西，直人
元西日本新聞社

<https://doi.org/10.15017/7388900>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 15, pp.184-195, 2025-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)
バージョン：
権利関係：



【寄稿】

奥田八二と「Museum Kyushu」誌

——社会思想史の専門家がのめり込んだ九州国立博物館誘致活動

大西 直人

奥田八二氏が福岡県知事に就任する 1983 年以前から、福岡県太宰府市に設置されることになる九州国立博物館の誘致に熱意を燃やして活動していた事実を知ったときは驚いた。九州大学教授を務めた奥田氏の研究者としての専門は社会思想史。エネルギー革命による炭鉱離職者を救済する「黒い羽根運動」など地域政策にも取り組んだ。国立博物館誘致は、奥田氏の直接的関心事ではないと思い込んでいた。1984 年から 85 年、そして 87 年から 90 年 2 月にかけて福岡県政記者クラブでも最若手の「奥田番」として朝に夕に取材したが、国立博物館誘致は福岡県知事の仕事として取り組んだという認識しか持っていなかった。取材の浅さを今は恥じるしかない。

思い違いを知ったのは 2002 年 3 月から 04 年 7 月にかけて、二度目の東京支社報道部勤務で文部科学省の記者クラブに登録されたときだ。02 年 4 月、後に九州国立博物館の初代館長となる三輪嘉六氏が、独立行政法人・国立博物館の九州国立博物館（当時は仮称という言葉が付いていた）設立準備室長に就任。05 年の開館に向けて展示実施設計、組織運営、開館記念展の準備、展示資料の購入などが一気に進み始めた時期だった。

明治時代の思想家岡倉天心が 1899 年、福岡日日新聞（現西日本新聞）の取材に応えて九州博物館の必要性を語って以来、「百年の悲願」である九州国立博物館がいよいよ実現に向かって具体的に進み始めたのである。誘致キャンペーンを張っていた地元紙の記者として日和見的な取材は許されない。時間があれば、上野の東京国立博物館にあった設立準備室に通った。誘致運動の歴史を知るために「文明のクロスロード」という副題が付いた「Museum Kyushu (ミュージアム九州)」という雑誌を過去にさかのぼって読み始めたのもこの頃だ。

同誌は、誘致運動の中心として 1980 年に誕生した博物館等建設推進会議（後に博物館等建設推進九州会議と改称）が機関誌として 81 年 1 月 1 日に刊行を開始。開館後の 2006 年 6 月まで計 81 号を世に送り出し、博物館の意義や文化財の重要性などを問うた。西日本新聞社が推進会議の事務局として原稿執筆や編集作業でも全面協力したことは知っていたが、その実質的な初代編集長が知事選立候補前の奥田氏だったことにも驚いた。前置きが長くなってしまった。「Museum Kyushu」の奥田氏関連ページをめくりながら、社会思想史と地域政策を専門とする奥田氏がなぜ国立博物館の誘致活動にのめりこんでいったのかをあらためて考えてみたい。当研究会の主目的である日記にも散見される国立博物館誘致に関する記述の裏側には、どんな思いがあったのだろうか。

●「博物館ごころ」とは

創刊号を開く。巻頭アピールとして博物館等建設推進会議の副会長の一人でもあった奥田氏は『博物館ごころ』の前進を！』という原稿を書いている。「博物館ごころ」とは何か。英国、フランス、イタリアに留学経験がある奥田氏は指摘する。「わが国も欧米先進諸国に劣らぬ博物館を抱えた国になるべきである」といいたいのである。



「Museum Kyushu」

財政力・経済力がないのではなく、その心が不足していると思うのである。経済が先進諸国に『追い付け追い抜け』の段階を乗り越えたなら、当然に、財政負担がかかっても、博物館を抱えた『生きざま』をしてほしいのである。「誰しも欧米諸国の博物館の立派なのに感嘆し、日本の博物館状況の貧弱なのに慨歎する。これは日本にカネがなく欧米にカネがあるからでなく、“博物館ごころ”の有無ないし『生きざま』の違いとみるしかないであろう」

博物館を建設し運営するためには当然のことながら多額の費用がいる。だから博物館の建設は簡単でなく難題であるというのは、すでに高度成長を達成し安定成長期に入った日本には言い訳にすぎないと奥田氏は看破する。経済成長最優先のエコノミック・アニマルを延長するだけなら、「経済大国・文化小国」のそしりを免れない」と断ずる。

その上で「美術館・博物館・劇場などは人類共通の文化の発達の産物なのであって、この分野で日本が貧弱だということは、日本人または日本の国の文化的後進性を意味する」と分析する。そうした文化施設の設置に向けた空気を醸成するのは、学者や芸術家、文化行政に携わる官僚など専門家に限らない。経済だけでなく文化も大切に求める気持ち、奥田氏が「博物館ごころ」と名付けた意識が立場や考え方を超えて幅広く一般大衆に広がっていくことこそが原動力となり、政治や行政を動かすと奥田氏は期待する。地域政策の研究者としての見立てだろう。ここに奥田氏が九州国立博物館誘致にのめり込んだ最大の「理屈」があると思う。

推進会議の発足を記念して開かれたシンポジウムでも、奥田氏は「日本の社会経済は、戦後（の昭和）30年代の半ば以降躍進し、生活は豊かになった。その半面、精神面や文化面は置き去りになっている。私が博物館建設に強い関心を示すのも、博物館が日本人の心と文化を豊かにするテコとなってほしいからだ」「日本の社会が客観的にモノから心へ重点を移行する情勢を踏まえ、主体的に博物館建設運動にかかわる機は熟した」と訴えた。それも「Museum Kyushu」創刊号で紹介されている。

●「中核的博物館」を構想する

九州国立博物館開館後の2006年1月に発行された「Museum Kyushu」第80号の「歴代編集委員長・編集委員徹底トーク」によると、同誌の名称は奥田氏が考え付いたという。推進会議の運営規約も、当時福岡市中央区六本松にあった九州大学教養部の研究室で奥田氏が「えんぴつをなめなめ」書き上げたとされる。創刊当時は九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学部）教授で、後に東京家政学院大学長を務めた田辺員人氏（環境設計）は「推進会議は奥田先生を中心にいろんなことが動いていたような気がする。奥田先生を中心に集まってわいわいやっていた」と述懐した。

奥田氏は推進会議での議論を「地域に根ざす中核的博物館の基本構想」の形でまとめ、その後の議論のたたき台として81年4月発行の「Museum Kyushu」第2号で文章化した。それによると、この基本構想は①地域に根ざす博物館②九州の際立った特徴を生かす③「九州学」の拠点とする④九州の中核的博物館とする—という4点にまとめられる。

地域に根ざす博物館とは何か。奥田氏は東京、京都、奈良の先行国立博物館のあり方について「皇室の宝物をしまっておく帝宝博物館で、地域住民には閉ざされていた」「日本の文化と歴史は奈良、京都、東京を中心に書かれており、地方の史観は欠落している」と厳しく論ずる。その批判的視線は、後の革新知事の面目躍如というところか。そして「地域に根ざす博物館とは、中央集権的な学問のあり方、帝宝博物館のような行き方に対する反省から、地域そのものを対象とし地域住民へのサービスに務める」と解説する。

九州については「歴史の始まりから近代まで常に対外交渉の窓口であり、九州に最初に伝わった文化が日本列島に波及していく結節点。文明のクロスロードである」と分析する。それは「Museum Kyushu」誌の副題そのものであり、今日に続く九州国立博物館の「アジア文明交流史」という一大テーマにつながっている。

その上で、奥田氏は「九州学は成立するか。空間の広がり意識した九州学は考えられないか」という命題を掲げる。「九州は一つ」を掲げるブロック紙の西日本新聞社で記者をしていた筆者にとっても、九州の一体性と各地域の個性にどう整合性を付けるかはなかなかの難問だ。九州で強引にくくってしまうと、九州の各地域から反発も生まれる。奥田氏は「地域内部に対立するものがあって、それをさらに統合する力が一方で働く。だからこそダイナミックな面白さが九州にはある」とまとめたが、この難問は知事就任以降も九州各県との関係で奥田氏を悩ませ続けた。

そして「中核的博物館」である。奥田氏は「九州には県、市町村、私立の博物館が大小160ぐらいある。多くの地方博物館を網の目のように結んで、手を取り合って九州の文化を研究する巨大な研究組織にする」と説明する。九州国立博物館はその要として、歴史資料を修復保存する保存科学や調査研究に取り組むとともに、市民や児童・生徒が実習体験などで楽しみながら学習し「市民と結びついた奥行き深い博物館」にしたいと訴えた。保存科学や実習体験などは実際に、九州国立博物館の大きな特徴となっている。ただし、この「中核的博

物館」構想が程なく大きな挫折を迎えることになるのは、奥田氏にとって想定外だった。

●原点となった「地域懇」

ここで時計の針を少し逆回転させる。「Museum Kyushu」創刊号発行に先立つ 1978 年 8 月 7 日、奥田氏を「代表幹事・事務局担当」として「総合地域政策懇話会」が発足している。詳しい経緯などは当研究会が 2023 年 3 月に発行した会報第 10 号に、坂井智明氏が『『総合地域政策懇話会』と『地域懇ニュース』』として執筆しているので、ご参照いただきたい。懇話会について坂井氏は「従来の社会党、社共共闘の枠だけでない幅広いネットワークを目指して立ち上げられたのではないかと分析する。九州国立博物館の誘致は政治的枠組みを超えて取り上げる格好のテーマだったのかもしれない。

懇話会は奥田氏が後に「Museum Kyushu」誌で「地域に根ざす中核的博物館の基本構想」を発表する原点になった。懇話会は毎月、講演会を開催し、その内容を中心に「地域懇ニュース」を発行した。地域懇ニュースは 1978 年 9 月に第 1 号を発行。86 年 12 月の第 94 号まで続いた。奥田氏は 79 年 8 月 7 日発行の別冊「地域に根ざした博物館を考える」を含めて地域懇ニュースに計 9 本の原稿を書いているが、そのうち 5 本が博物館関連である。

別冊には「福岡に博物館を」を寄稿。「この地域で育つ子どもたちのために、この地域で生活する平凡な大人のために、まずは教育的機能をできるだけ大きく果たせる博物館が構想されたらよい」「物質的に豊かになりすぎたとさえいえる今日、その物質力を、もっと心を養う方面に使うよう発想を転換したらどうだろう」と呼び掛ける。

続いて 79 年 9 月 20 日には、早くも「地域に根ざした博物館を考える」と題して「博物館に期待するのは、地域の文物の収集・展示。研究が基本」と主張する。そして 80 年 3 月 20 日の「博物館建設推進運動のために」では、九州・山口各県にある博物館などがネットワークを組む際の要となる中核的博物館を構想する。この時点で奥田氏の「基本構想」の方向性は固まっていたといえる。地域政策を研究する奥田氏は、国立博物館構想もやはり地域を主眼に考えており、福岡県、あるいは九州・山口という地域の教育や文化の拠点として九州国立博物館の設置に期待を寄せていたと思われる。

●インタビューで受けた挫折感

奥田氏が「Museum Kyushu」誌に主体的に関わったのは 82 年 5 月発行の第 6 号までである。同年秋、奥田氏は翌年の福岡県知事選に旧社会、共産両党推薦の「革新候補」として立候補することになり、政治的にも物理的にも同誌に携わることが不可能になった。

わずかな期間ではあるが、「Museum Kyushu」誌上で奥田氏は、国立博物館誘致に大きな足跡を残した。各界の有識者に対する博物館構想に関するインタビュー記事である。奥田氏がインタビュアーを務めたのは、81 年 10 月発行の第 4 号では大阪府吹田市の万博記念公園に 77 年開館した国立民族学博物館で初代館長を務めた梅棹忠夫氏、82 年 2 月発行の

第5号は東京国立博物館の斎藤正館長、そして第6号が東京大学名誉教授で文化財保護が専門の関野克氏というラインナップだった。

中でも注目されるのが梅棹氏へのインタビューだ。その後の「Museum Kyushu」誌の編集方針にとどまらず、九州国立博物館の構想そのもの、もちろん現在の九州国博の展示運営にもかかわる重大な指摘を梅棹氏から受けることになる。それは奥田氏がまとめた「基本構想」の核心ともいえる「九州の中核的博物館」「地域に根ざす博物館」「九州学の拠点」に対する否定的見解だった。

地域懇以来、奥田氏が温めてきた構想の柱について、梅棹氏は「(九州国立博物館を造るなら)九州の郷土博物館とは違う。九州の特性そのものを対象にしたものであれば、それは九州各県の組合立の博物館で十分だ」と切り捨てた。インタビューを終えて福岡に戻った奥田氏は「地域に根ざす(構想)なら、国立博物館は不要と言われてしまった」と失望感をあらわにしたという。

ただし梅棹氏は、奥田氏の「基本構想」を全否定したわけではなかった。残る「九州の際立った特徴を生かす」として挙げた「文明のクロスロード」という視点については「九州が日本にとって大陸文化が入ってきた玄関であることははっきりしている。日本文化全体から、文明のクロスロードを手掛かりに発想したらどうか。北部九州に国が建設するなら、やはり古代博物館になる」と賛意を示しつつアドバイスした。

奥田氏は一時的に挫折感で落ち込んだだろうが、このインタビューは誘致活動に大きく貢献する。九州を強調する熱意だけでは国立博物館誘致は実現しないことを、奥田氏を含む関係者は思い知ることになった。国立博物館が国立でなければならない理由、そして九州の地に誘致するに値する構想に正面から向き合う必要性に迫られた。構想の方向は「九州の中核的博物館」から「アジア文明交流史博物館」へ急カーブを切っていく。九州の論理だけでは国全体の共感を集めるのは難しいという教訓も誘致活動に与えた。

福岡県太宰府市が刊行している「太宰府市公文書館紀要(年報太宰府学)」第15号(2021年3月発行)に、大阪大学名誉教授(地理学)で「Museum Kyushu」の編集にも携わった小林茂氏が執筆した「九州国立博物館誘致運動に関する資料—運動の経過と課題—」によると、奥田氏と梅棹氏は旧知の間柄だったという。奥田氏はロンドンに留学中の1971年、国立民族学博物館設立に向けてヨーロッパの博物館を調査していた梅棹氏と懇談したという。初顔合わせではなかったからこそ、厳しい内容も含めた率直なインタビューになったのかもしれない。安易な賛同では何の意味もなかつただろう。

●日記にあふれる心情

福岡県知事就任前から九州国立博物館誘致に、これだけの「実績」を積み上げた奥田氏だけに、知事在任中の日記にもしばしば国立博物館関連の記述を残している。多岐にわたる政策案件の中でも比較的多く取り上げていると感じる。

大学教授から知事に立場を変えた奥田氏がまず直面したのは、国に対する要望活動、いわゆる陳情への戸惑いである。「私は陳情というものはあまり好きではない。否定はしないが、そんなことをしなくてもなすべきことをすればいいではないかといわんばかりの考え方があった。が理屈はそうであってもそれが政治の場で政治というフィルターを通して現実がつみ上げられる限り陳情というものの現実的価値が自己貫徹するのである」(1984 年 4 月 9 日) と自らに言い聞かせている。

とはいえ予算を預かる大蔵省(現財務省)も、事業を担当する文部省(現文部科学省)や文化庁も簡単には首を縦に振らない。当時は国の予算を前年度と同額に抑えるゼロシーリングの時代。「九州に日本民族のルーツを語る博物館をつくる価値があり、それが国の責務でもあるということは、識者なら誰でも納得しよう。文化庁だってそれは理解できるはずである」(同)「大蔵省サイドでは、九州国立博物館建設に大きな拒否反応が消えていないのが残念である。先日も大蔵の関係主計官に陳情した際、今なぜ九州なのか、財政再建、行政改革の課題が今なお残っている云々とはじき返された」(89 年 1 月 22 日) とこぼす歳月が続く。

そんな中で、奥田氏の知事就任前から抱いていた誘致への思いと活動を知ってか知らずか、福岡県内外で「革新知事の奥田氏では九州国博は誘致できない」との観測がまことしやかにささやかれた。奥田氏は悩まされたに違いない。負けず嫌いで知られる奥田氏に「なにくそ」の思いも抱かせたはずだ。日記がうっぶん晴らしの場になったのか「(県議会の一般質問で自民党議員が) 国博誘致につき、知事は何もしていないのではないかと、口汚くののしった。こんなのがいると、だんだんやる気が弱まってゆく。知らんくせに、という反発感がもくもく湧いてくる」(1989 年 10 月 4 日)「誘致が実現すると奥田に名をなさしめるといふチャチな思いがないとはいえない」(同年 7 月 11 日) といった記述も数多くみられる。

とはいえ奥田氏の知事在任中、誘致の態勢は強化され、88 年 6 月には九州各県の官民が一体となった「九州国立博物館誘致推進本部」、同年 8 月 9 日には九州選出自民党国会議員による「九州国立博物館設置促進国会議員連盟」が立ち上がった。90 年には「九州国立博物館(仮称)基本構想策定委員会」が発足。文化庁長官を務めたこともある作家の三浦朱門氏を会長に、各分野でトップレベルの研究者が顔をそろえた。87 年 7 月 29 日に福岡県出身で文部事務次官や自民党参院議員、文相を歴任した劔木亨弘氏を東京の事務所に訪ねた際に受けた「全国の学識者の動員も必要」との助言が実現する形になった。

こうした動きも後押ししたのだろう、89 年度政府予算に 220 万円とはいえ国立博物館運営調査費が計上された。調査費は 90 年度 375 万円、91 年度 480 万円、92 年度 596 万円と少しずつ増額され、93 年度にはついに九州を特定した整備運営研究調査費 996 万円が計上され、建設への道筋は着実に敷かれていく。93 年度政府予算案が固まった 92 年 12 月の日記「要記」に、奥田氏は「何とか目鼻がついてやれやれ」と安どする。

同年 12 月 1 日の日記には、11 月 29 日に 91 歳で亡くなった劔木氏に触れ「知事になる

前から国立博物館建設誘致運動で、東京の事務所を訪ね、よくお世話になった。国立博物館はもう一步前進した成果をつかむまで頑張らないと。この博物館は日本・アジアを代表するものに仕上げていく必要がある。われわれが打ち上げたからには責任を感じずる大問題だ。アジアに誇れるものにするには無限の夢がわく。劔木さんの逝去に関連してこのようなことを思った」と決意を新たにしている。

●立場や考え方は異なっても

奥田氏は95年4月に知事を退任。2001年に80歳で亡くなった。九州国立博物館の05年10月15日の開館はもちろん、02年4月の起工式も目にはなかつた。同年6月発行の「Museum Kyushu」72号の着工特集で、西日本新聞編集局長を務めた玉川孝道氏は『『たいまつ』は引き継がれる』と題して、誘致活動に深く関与した奥田氏ら故人を列記し「起工式で顔を見たかった」と残念がった。

奥田氏に関しては「奥田八二前福岡県知事の苦闘もあった。九州大学教授時代から運動を支え、その粘り強さは敬服のほかはなかつた。知事になって『革新知事に博物館はつくれない』の雑音に耳を貸さず（時には弱音も）、一貫して誘致の旗を振り続けた」と書いた。

玉川氏が取り上げた故人はほかに、福岡県教委文化課長として大宰府遺跡の発掘調査を指揮し国立博物館の必要性を訴えた藤井功氏、博物館等建設推進会議の会長を務めた九州電力会長の瓦林潔氏、西日本新聞社の経済記者として九州財界に誘致運動への協力を呼び掛けた中野学氏、14万平方メートルの博物館用地を寄付した太宰府天満宮宮司だった西高辻信貞氏。立場も考え方も異なる人たちが、九州国立博物館を実現するという一点で力を合わせた。

筆者は文部科学省と福岡県教育委員会を計三度にわたって担当した。取材要員に限られる地方紙で、いずれも首相官邸や福岡県庁などとの「掛け持ち」だった。どっぷりつかつたとは言えないが、逆に教育・文化行政のありようを俯瞰的、横断的に見ることができたと思う。この分野が政治に巻き込まれやすいことも理解させられた。県議会で奥田氏が自民党議員などから浴びた「革新知事では国立博物館はできない」との追及は、その些末な一例だろう。

戦前・戦中の軍国主義教育でも分かるように、政治はその形態に関わらず権力維持のために教育や文化を利用しようとする。人々の心に何かを植え付けるために教育や文化の影響力を使おうとするからだ。だから教育や文化は政争の具となりがちなのだろう。だが本来、教育も文化も立場とか権力とかからは独立しているはずである。特定権力への忠誠心を心に染み込ませるのでなく、自由な知識や安らぎ、豊かさを育むことが目的だ。

九州国立博物館の実現を目指した活動は、党派や立場を超え、地域とか中央といった区別もない希少な一大ムーブメントだった。旧社会党の理論を支えた奥田氏と経済界の重鎮たちがスクラムを組めた理由がそこにある。奥田氏が実質、編集長を務めた「Museum Kyushu」

第 2 号には後に奥田氏に福岡県知事の座を追われる亀井光氏、第 5 号では 1987 年 4 月の知事選で奥田氏と激突することになる田中健蔵氏が誘致への意気込みを「メッセージ」「アピール」の形で寄稿しているのも興味深い。奥田氏が掲げた素朴な「博物館ごころ」に文化や教育を悪用しようとする妙な思惑は入りようがない。九州国立博物館誘致活動は、奥田氏に限らず、九州にとっても地域課題を具体化することができた貴重な経験だったと思う。



九州国立博物館

※日記などの記述で一部、かな遣いをあらためています。

【参考文献】

- ▽「Museum Kyushu 文明のクロスロード」博物館等建設推進九州会議 創刊号～第 6 号、第 72 号、第 80 号、第 81 号
- ▽「奥田八二日記研究会会報」第 10 号 奥田八二日記研究会 『『総合地域政策懇話会』と『地域懇ニュース』』 坂井智明
- ▽「太宰府市公文書館紀要」第 15 号 福岡県太宰府市 「九州国立博物館誘致運動に関する資料―運動の経過と課題―」 小林茂

【日記再掲】

主な九州国立博物館誘致関係の日記を再掲します。部分的に省略した場合があります。

■1984 年

▽4 月 9 日 陳情

文化庁に国立九州博物館の建設について陳情に行った。長官・次官が対応してくれたが、従来と違って冷淡な対応だったのでびっくりした。九州に日本民族のルーツを語る博物館を作る価値があり、それが国の責務でもあるということは、識者なら誰でも納得しよう。文化庁だってそれは理解できるはずであるのに、名古屋（科学博物館誘致）を優先して念頭に置くようになったとすれば、それは陳情力の差かもしれない。私は陳情というものあまり好きではない。否定はしないが、そんなことをしなくてもなすべきことをすればいいのではないかといわんばかりの考え方であった。が理屈はそうであってもそれが政治の場で政治というフィルターを通して現実がつみ上げられる限り陳情と

いうものの現実的価値が自己貫徹するのである。

■1986年

▽9月2日 松本清張氏に会う

立派な応接室に案内された。早速もって来たミュージアム九州全二〇冊を開いて、大和朝廷以前の日本民族を扱う国立大規模近代的博物館建設運動の意図、文部省側の現時点での対応状況などについてのべ、彼の意見をきくと同時に、援助方も要請した。ほとんど異論は示されず、博物館の予定位置、構想などについて尋ねられ、雑誌に及んで日本人は祖先は大陸から渡来したものであるとか、文物の渡来は人の渡来を示すことが忘れられているとか、縄文の日本人と古墳の日本人は全く同じでないとか、彼の積極的意見の開陳があり、^{めずらしづか}珍敷塚古墳がトルコの古墳に酷似していることなど写真実例でもって示された。私は竹原古墳の例も出した。名残惜しげなお別れになって七時に辞した。

▽10月21日 九州国立博物館の見とおしについて

上京して事あるたびに九州に博物館を国立でという陳情をする。今日も文部次官（高石）にその話を持ち出した。高石氏はやや冷ややかだった。近頃は文部省の考えもやや前向きになったようだが、やり方を第三セクター方式でという発言に改まってきた。今日の高石発言では、九州らしい特徴をもって、大陸との関係、大陸文化そのものを積極的に打ち出したらどうかという。少しは光明がでてきたように思える。県においても教育委員会文化課だけにまかせず、企画部門で積極的に対応すべきであろう。

■1989年

▽1月11日 九州国立博物館への里程はまだ長い

このたびの予算編成の中で文部省は博物館建設につき、やっとなら二〇〇万円の概算要求をすることになったが、十九日予定の大蔵省内示でこれがどう扱われるか問題である。大蔵の役人たちはなぜ福岡に国立のが必要なのか、欲しければ県で、又は九州各県共同負担でやればよいというような認識水準でしかない。奈良や京都にもあるではないかともいっているとか。八世紀以降しか研究されていない“一等国”があつていいものだろうか。そんな認識の役人が大蔵に幅をきかせている。文部省だって大同小異。神話の時代をほじくらない方がいいと言う有力者がいるほどだ。九州国立博物館建設の途は長い。

▽1月22日 「金印」の背景を知ろうとしてほしい

今回の政府予算案の編成は例年より一カ月近く遅れることになったが、県サイドから見れば、この時点で、よくつけてもらったといえる。ただ大蔵省サイドでは、九州国立博物館建設に大きな拒否反応が消えていないのが残念である。先日も大蔵の関係主計官に陳情した際、九州・福岡のほかにも似た要望があるのに、今なぜ九州なのか、財政再建、行政改革の課題が今なお残っている云々とはじき返された。経済大国といわれる日本で、七世紀以前の解明がなおざりにされているということの不均斉を、この主計官

はわかろうとしないのである。六世紀までの間に、九州が果たしてきた大陸との交渉を思うなら、そういう言い分は成り立たないはずである。「金印」を受けた時の日本の社会状況を証明してみようと思わないのだろうか。お粗末な金庫番といえるだろう。

▽6月17日 教育行政批判

夕刊は知事が高教組大会で教育行政の「おくれ」を批判したと書いている。革新県政に対する保守の「牙城」が教育委員会ともいう。今回の教育長問題についてもほとんど連絡はないし、国体や国立博物館誘致についても連絡がない。むしろ敵対的にすら動いている。国博誘致についてもっと予算をつけようとする、要求もしない予算をつけようとしたと反撥する。恐らく国博の理念や構想についてもほとんどみるべき形になっていないのではないかと思う。

▽7月10日 六月末文教委での井手、大石発言を忘れぬように自分にいって胸にしまい込む

六月末の県議会文教委で、小郡の井手、浮羽の大石両県議が私に詰め寄ったのをまた思い出した。とくに大石は私に国博誘致対策本部の運動に知事は水を差したとなじた。私はその力で文教委での発言を全部取り消すことになったのだが、この二人には改めてウラミをもち、忘れえぬものだとここを改めて記録しておこうと思う。察するにこの二人は国博誘致はなぜか、何を意図しているか分かっていないくせに、単に知事攻撃としてのみあの発言をしたのだろう。

▽7月11日 国博誘致へのもう一步(上)

どうも国立博物館誘致運動のことが気になる。これまで民間サイドでやってきた西日本新聞が、その態度疑問である。誘致が実現すると奥田に名をなさしめるというチャチな思いがないとはいえない。

▽7月12日 国博誘致へのもう一步(下)

国立博物館誘致には議員族や経済団体や行政マンによる「力」「形式」(運動本部)のほか「金屏風」としての理念、理屈付けが全国レベルのものとして必要だというのが私の今の主張の力点なのである。林副知事ら財界の者と共々に西岡文相に陳情して「金屏風」の必要性を認め合ったらしいが、誰がその中核となって動くか、大蔵省の小役人でも尤もだと言わざるをえないような理屈の絵を描く仕事を誰が中心になってやるか未だ未だ明らかでない。力でねじ伏せると同時に掌を合わせて拝礼させないと政治にならないのだ。国博誘致には「教」が必要なのだ。県議にわかる筈がない…

▽10月4日 国立博物館誘致について

一般質問で自民党の久保が、井手などにそそのかされ、国博誘致につき、知事は何もしていないのではないかと、口汚くののしった。こんなのがいると、だんだんやる気が弱まってゆく。知らん癖に、という反撥感がもくもく湧いてくるが、答弁では抑えて表現しなくてはならない。今、第二国立劇場のあとの大プロジェクト発起のチャンスなのに、

失脚した元文部次官高石、さらには県教育長竹井らで組んで「奥田に名を成さしめるな」を合言葉に運動の頭を抑え、県行政の中で手抜きし、形だけの自民系の議員首長を結束させ運動体を作りひきまわしてきたもので、文部大蔵の両省も陳情を鼻にもかけぬ態度で対応してきた。西日本新聞もその一翼を担っているのだ。だったら足の引っ張り合いみたいになって、彼等の言うように、誘致の実現はおぼつかなくなるのではないかと思う。「知事の努力不足」呼ばわりをしつつ事を困難にしているのだ。

■1990年

▽6月1日 博物館基本構想緒につく

九州国博の基本構想策定委十八人と推進本部側十人とで、中洲仲柳で懇親晚餐会を行った。明日構想策定委員会がある。全国レベルの学者が選抜動員され、国博の基本構想に取りかかってもらう段階に来た。梅棹忠夫氏が学者を動員しないとだめだといっていたのを思い出し、やっと誘致運動も緒についた思いである。この顔ぶれで文部省も重い腰をあげざるをえなくなるとの見方がでてきた。

■1992年

▽7月31日 九州国博誘致のつどい

紀尾井町のニューオータニで九州国立博物館誘致のつどいが五時半から七時頃まで行われた。国博誘致をねらいとするシンポジウムにつづき夜のレセプションだったが、シンポジウムに有名外国人も加わってもらい盛大裏に運んだというレセプションも九州レベルの国会議員（二階堂、西岡など）をふくみ、県議会の文教委員もずらり出席してくれていた。教育委員会の教育長以下各職員が文化課を中心に人集めや会の進め方で大変骨を折ってくれ、こんな会に持ち込んでくれた努力は大きい。国会議員の大物達はまだ逃げの姿勢が見えなくはないが、今日ので一步前進とみてよいだろう。

▽12月要記

年末の政府来年度予算案への陳情は九州国立博物館と新北九州空港への見とおしが可能となるよう努力する二大目標があるが、この二つは何とか目鼻がついてやれやれ。文部省文化庁はなぜ博物館づくりに明確な姿勢をとらないのだろうか。他に及ぼす影響を配慮してとも聞く。だったら、他の文化大事業に劣らぬ運動（事前PR）を今後ともどしどしやっていく必要がある。

▽12月1日 アジア文明博物館を

もう一人近頃大物の死去があったと思っていたら、元文相の劔木さんのことだった。知事になる前から国立博物館建設誘致運動で、東京の事務所を訪ね、よくお世話になった方。次に東京に行った際は是非お悔やみに訪ねたいと思っている。国立博物館はもう一步前進した成果をつかむまで頑張らないと。この不況、政府の態度は覚束ない。どんと思い切った文化政策がなぜ打ち出せないのであろうか。アジア文明博物館構想が出ているのだから、この博物館は日本・アジアを代表するものに仕上げていく必要がある。

われわれが打ち上げたからには責任を感じずの大問題だ。その点十数年前に訪ねた上海博物館の雄大さを思い出す。日本は経済大国を誇ることはできるが、文化政策は見劣りがする。アジアに誇れるものにするには無限の夢がわく。劔木さんの逝去に関連してこのようなことを思った一日だった。

■1993 年

▽10 月 9 日 アジア文明博オープン

アジア文明交流展「邪馬台国への道のり」が始まった。十一月十四日まで。弥生時代（紀元前三世紀頃から紀元三世紀前半ごろまで）が中心。イネ、ムラ、クニ、王墓、金印、卑弥呼がテーマである。中国と韓国が協力してくれ、^{てんおう}滇王の印、^{かぼと}河姆渡遺跡文物などこの時代ならではのものが借りられた。中国の浙江省博物館毛昭晰氏はこの展覧会テキストの中でイネについて次のように述べている。「稲作が日本に伝わったルートは、一部の学者は江南から中国北方を経て朝鮮半島に至り、その後さらに北部九州に伝わったと考えている。しかし、浙江の舟山群島で出土した新石器時代と戦国時代の稲もみは、稲作農業が浙江から直接九州に伝わった可能性を示している。稲作とともに日本に伝わったものには、そのほか蚕糸、漆器、中国南方特有の高床式建築物があるであろう」と。今回の企画が、日本の文明の夜明けを示唆する諸材料を与え、国立博物館誘致にはずみがつくことは間違いない。国立と九州の存在意義が明らかになろう。

▽11 月 25 日 九州国立博物館誘致のゆえんが判っていない

自民党筋で約束通り国立博物館建設促進のため十一月末までに県としてなしうる協力策を示すべきなのに未だ案ができていないとかいっていたが、それはどこまでできているのか。知事の答え如何によっては十二月議会は止まるかもしれぬと執行部に迫ってきている。今日の国博特別委で教育長がいったことが夕刊に出て混乱を拡大しそうになった。県が協力案として国際文化交流センター（学術文化センター）を建設すると答えたかのような報道である。国立博物館を九州に（福岡県とか太宰府に）という基本構想からかなり縁遠い大きな荷物が飛び出したというべきだろう。私がこれを OK というわけにはいかぬ。であれば十二月議会は混乱の度を深める。県議会も職員も「九州に国立の、博物館を」という意味、内容がほとんど分かっていないし、又意思統一もされていない。さらにそうする場がないのは誠に残念である